

東方四王錄

哀樂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遺跡に居たはずの遺跡ポケモン好き主人公が遺跡を調べてたら
なんか転生することになつた遺跡ポケモン好きの主人公の物語

目 次

プロローグ 古代に生まれし妖怪 |
第一話 森にて： |

5 1

プロローグ古代に生まれし妖怪

よう！俺はポケモンが趣味の遺跡探検家！

今日も遺跡を調べていたら・・・ドウシテコウナツタ
俺は今真っ白い場所にいる。いや、落ち着け俺なんでこうなったのか考えてみよう
遺跡に来た↓一人探索してた↓石碑を見つけた

↓パズル見つけ↓解いた↓光つた↓ここにいる↑今ここ

なるほど：たぶんあの石碑が原因だろうなところでここは…

「おや？また誰か来たのかい？」

なんか後ろから聞こえた後ろを向くと身長150cmほどの女の子がいた

「誰が女の子だ男だよ僕」

あれ？男か…あれ？声に出してないよな？

「ああ、この世界なら僕心読めるから」

「ああそう…でんただれ？」

「そういえば言つてなかつたね。僕は最高神。古の約束で君を転生させてあげます」

は？「何？古の約束って」

訳が分からなくなってきた

「あれ？ 石碑訳さないでパズルだけ解いたら？ これは困った…」

あの石碑と一緒にあつたアナグラムの事らしい

「で、遺跡に戻れないのか？」

「残念だけど転生しかないんだ…」

「そうか…」 …そのかわり好きな世界に転生 「東方で」 速いって！ あの人も速かつたけど

君もつと早いよ！」

「そ、そ、うか？」 そんなに速いのだろうか…それにしてもあの人つて誰だろう？

「はあ…東方ね。みんな好きだね東方…で、あの世界は危険だから特典と能力を上げよう…なにがい 「特典はレジギガスの力とレジスチルの強靭さ能力はレジロックの磁力を操る能力とレジアイスの氷を操る能力で」 早!? 早口過ぎない!? 全部言うのに2秒もかかるないってどういうことだよ！ というか最後まで言わせて！」

「まあ以前早口つて言われてたしね」

「…落ち着け…落ち着くんだ俺…こんなのどうつてことないはず…気にしたら負け…そういう気にしてたら負けだ」

神様がなんかうろたえてる…まあいいか

「ふう…サイダー飲んだら落ち着いた。さてと、特典と能力は分かつたけど世界にはど

んな時に入る?」

おつと、これは重要だな。そうだな…

「じやあ永琳の子供の時代」

「分かつたじやあ種族は？」 「種族？」

「妖怪なら河童とか天狗とか⋮」

「じゃあ妖怪で種族は氷女と九尾のハーフで」

「そんなピザみたいな…まあいか次にどこに転生する？おすすめは都市だけど」

都市もいいけど…せつかくだから…

「都市の近くの森で」

ン? 都市じやないのか? 最後に生前の格好のまま転生する? それとも赤ん坊から?

۲۷۳

少し迷うけど…「このままでお願ひします」

「あいよ、それじやあいつてらつしやい。あ、能力の使い方はの明書。ポケットに入れとくから」

「はい。ありがとうございます」

「ンじゃ、改めていつてらしや〜い」パカ「落ちるのかよおおおおおーーーーーーーーーー落とされましたそして意識が薄れていく…

4 プロローグ古代に生まれし妖怪

続
<

第一話 森にて…

ここは穢れの森都市からは危険な場所とされているが実際はかなり平和な場所

今日もとある????が散歩ルートを散歩していた

うわああああああああ！？」

歌つていた??はいきなり聞こえた悲鳴らしきものに驚き周りを見渡し始めた
しかし意味がなかつたなぜなら

上から降つてきたから
ゴーン！

卷之三

(転生者視点)

「うう、いてえ…」いきなり視界が開けたと思ったら落ちていく
そして何かにぶつかり気絶して今目覚めたという状況である
すぐに周りを確認する：危険はなさそうだ
さて、周りの状況は…

1森の中2自分を中心にクレーターになつてゐる(直径約150cm)

3 何か踏んでる4 その何かは青色5 何かは柔らかい6 冷たい
7 これ女の子だ…

気づいてすぐにどいたするとそこにいたのは後姿がチルノに似た身長の高い（チルノの2～3倍ぐらい？）

女の子がうつぶせで倒れてた…なんかマフラーしてるけどこれ誰だろ？けーねなわけないし…とりあえず木陰に運ぶか…よしOK。さて、この子誰だろう
作者より　　主人公は二次創作を知りません

「ん、んん…。」そんなこと考えてたら女の子が起きました
「あれ、…私は…確か何か降ってきて…!! あなた誰！」

こちらに気づき簡潔に敵かと聞いているようだ

「落ち着け、俺は敵じゃない。むしろ君と同じ被害者だ」「あ、そ…そう…ごめんなさい」
納得したのか少しもうしわけなさそうに謝った

「いや、いいよ。それよりここはどこなのかな。それと君の名前は？それとこの近くに
何かあるのか？」

簡単に重要な二つを聞く

「一つずつ答えていくわ。ここは穢れの森私はチルノみんなからはチル姉って言われて
るわ

「この近くには都市と霧の湖があるわ」

なるほど…都市の近くか、それと霧の湖ね…え、チルノ?

「君がチ「質問に答えたんだから」つちの質問にも答えてもらうわよ」：はい」

質問返しですか

「まずあなたは誰?それとこの変じや見ないけどどこから来たの?」

ま、セオリーな質問ですね…ん?

俺：名前ないじやん

(何かないか何かないか…ん?) ふとここでポケットに何か入つてることに気づく
「ちょっと待つてくれなんか見つけた」「…まあ、待つわ」 よし。それじゃあ読もう

やあ、君を送つた神様だよ。向こうの世界についてすぐはよくわからないと思うから
ここに書いとくよ。まず君の名前は鉄岩 巨氷(てつがん きよひよう)

それと能力の使い方は頭に浮かべて使う…

超能力みたいなカンジだからよろしく

それとどうやつてきたかつて聞かれたたらさつき生まれたとでも言つといて
p sがんばれ

「…どうやら俺の名前は鉄岩巨氷らしい…さつき空の上で生まれて落ちてきたらしい」

「そんなことつてあるのかしら…？まあいいわ…あなた住むところとかないでしょ」

「ないね」「じゃあしばらく私の家に泊めてあげる」「いいんですか？」

「少し看病してくれた恩よ。ただし、家の手伝いとかはしてね」
「はーい」そんなわけで家へと行くのであつた

続く